天文学者新城新藏の丙午迷信打破活動

株 本 訓 久*

1．はじめに

本発表[1]の目的は、京都帝国大学理科大学物理学科に新設された宇宙物理学講座（後に宇宙物理学科として独立）初代教授である天文学者新城新藏（1873–1938）[2]が取り組んだ丙午を中心とした迷信打破活動の歴史的意義を明らかにすることにある。

新城新藏は、太陽系を含むすべての天体の形成及び進化に関する理論「宇宙進化論」を形成し、脈動理論に対抗する理論としてケフェイド変光星の離心的心核説を提唱とすると共に、中国古代天文学の独自発展説を唱え、学習院中等科教授飯島忠夫らと激しい論争を繰り広げたことで知られている。さらに新城は新聞、雑誌、ラジオを通じて、広く一般の人たちを対象に天文学を中心とした科学の普及活動にも取り組んだ。新城の普及活動の中で特徴的なもののひとつが、中国天文学史研究の成果に基づく丙午を中心とした暦に関する迷信の打破活動である。

今回、本発表では新城新藏が発表した迷信打破に関する論考を基に、新城が迷信打破活動に取り組むこととなった経緯、彼の科学と迷信の関係の捉え方、新城の丙午の迷信打破に関する具体的な方法を明らかにすると共に、彼の活動に対する家相学者及び姓名学者による批判を分析することで、新城の迷信打破活動の歴史的意義の解明を試みる。

2．新城新藏の迷信打破活動

新城新藏は迷信打破に関する論考をまとめ、『迷信』興学会出版部、1925年及び『迷信　新版』恒星社厚生閣、1939年（新城の死後出版）として発表している。ここでは『迷信』からの引用を中心に、新城の迷信打破活動について見ていくことにする。

2.1. 迷信打破活動の契機

新城は、迷信打破に関する最初の論考「暦の統一　四　暦日に關する迷信　五　暦の一統」[3]において、迷信打破活動に取り組むことになった契機を「是等の迷信は、何れも其來歴からは杜撰であり、實際上からは無意味有害のものである、科學的思想の普及と迷信打破の宣傳とによりて、速かに絶滅に歸せんことを望んで止まない」[4]のように論じており、「旧暦」に記された「無意味有害」の迷信を科学的思想の普及及び迷信打破の宣伝によって絶滅させなければならない、と考えていた。その一方で新城は、この論考において「迷信」を生業とする人々に対して、

> 私は一歩を退いて、華族一代制論の考へに則り迷信漸滅論を索したいと思ふ。迷信を一代限とすれば、古き迷信はやがて時と共に流れ去るに違ひない。少くとも明治五年改暦詔書発布以後

* 武庫川女子大学附属総合ミュージアム　Email: kabumoto@mukogawa-u.ac.jp

の人人だけでも、迷信否定の一團を形成することが出來れば、迷信の絶滅は期して待つことが出來るであらう[5]

と論じ、一定の配慮を示している。その後、丙午生まれの女性に関する問題が新聞紙上で注目されるようになると、新城は丙午の迷信打破を活動の中心に位置づけるようになった。

2.2. 新城の迷信打破活動に対する立場

新城は『迷信』第1章において、迷信打破活動に対する自身の立場を3つに分けて示している。1つ目は、丙午の女性の親としての立場である。新城は、

> 若し假に自分の娘が丙午歳生れであつたとすれば如何、丙午の迷信が祟りをなして多少なりとも縁遠いとしたならば如何。迷信はもはや遊戯ではなく嚴肅なる人生の問題である。眞面目に排斥しなければならぬ懸命の問題である…（中略）…私は少くとも有識階級の人々は、自分が丙午の娘を持つた心持ちになつて、迷信一掃に努力せられんことを望まざるを得ない[6]

との見解を示している。このことは、新城の母親タツ（ヒサ）が弘化3（1846）年の丙午の8年前の天保9（1838）年生まれであり、彼の長女京子が明治39（1906）年の丙午の2年前の明治37（1904）年生まれ、次女文子が2年後の明治41（1908）年生まれであるという、新城自身が丙午の迷信の問題を直接、見聞きした世代の女性の子であり、丙午生まれの女性の親の世代であるということに起因しているといえるだろう。

2つ目は科学者としての立場である。新城は科学者として立場から科学と迷信の関係を、

> 科學と迷信とは明暗正邪全く相反するものの如くであるが、迷信にして吉凶禍福を問題として居るものは、其目的に於ては全く科學と同一であるといはなければならぬ。科學は畢竟組織立ちたる合理的方法によりて吾人の周圍の世界を研究して吾人の福利增進に資せんと努力して居るものに外ならぬからである。科學者は迷信を敵としてこれを撲滅せんと努力して居るのであるが、迷信家は決して科學に背いてはならぬ。迷信家にして吉凶禍福を問題とせざれば乃ち止む、苟くもこれを念頭に置く以上は決して科學に背を向けてはならぬ、先以て科學的研究の結果を聽かなければならぬ筈である[7]

と述べ、「科学者は迷信を撲滅する努力をしている存在」と定義している。さらに新城は宗教と迷信の関係を、

> 迷信的事項の多くが動もすれば宗教と關聯せるもの丶如く思はれて居ることは悲しむべきことである。怪しげなる加持祈禱等によりて現世利益を享くることを目的とせる多くの僞而非宗教が存在して居ることは事實であるが、是等は決して眞正に宗教的のものではない、堕落せる宗教の半面として斷じて排斥しなければならぬ。宗教は精神的のもので、利害得失を超越したものでなければならぬ。神佛と商賣取引をするものではない[8]

と述べ、現世利益を目的とした迷信は似而非宗教であるとして、宗教と迷信を明確に区別している。

3つ目は、自己成就的予言の受容に対する批判的立場である。新城は、

> 「自分は信じないが世間や老人が喧しいから」といふ口實は普通に耳にする所である。鬼門や友引の迷信などは多くは斯の如き程度で蔓延して行くのであるが。熟々吟味すれば、世間や老人といふのは多くは表向きの遁げ口上で、多くの場合當人の心が怪しいのが普通である。若し眞に世間や老人に遠慮してのことならば深く心配するに及ばない。新陳代謝、やがて迷信一掃の時も期し得るであらう。切に各人の自覺を望まざるを得ない [9]

と見解を示し、迷信の非合理性そのものに加え、迷信に対する自己成就的予言を受容する態度を批判している。さらに新城は迷信打破の方法を4つに分類し、そのうちの1つ「迷信其物の起原來歷を明かにして、傳統的にも何等の有難味のなきものなることを暴露すること」[10]という方法に基づいて、迷信打破活動に取り組むことになる。

2.3. 新城新藏の丙午の迷信打破

新城が丙午の迷信打破を活動の中心に位置づけるようになった契機は、『朝日新聞』1924年2月10日朝刊に「ことし十九歳の迷信に悩む娘たち　縁が遠いと『丙午』をかつぐ　愚かなる迷ひ心」が掲載されて以降、丙午女性の悲劇や事件が新聞報道されるようになったことであった[11]。

新城は丙午の迷信に関する最初の論考「丙午の年に生れた女の運命＝憫れむべき迷信の犠牲者＝五行説のでたらめ＝」及び同論文に加筆修正を行ない、『迷信』第二章　各論に再録した「(6) 丙午」[12]において、「もとく五行說なるものがでたらめなるものであり、年の干支や、干支を五行に配當することも、共に全く氣儘に定めたもので何等の理由のあるものではないので…（中略）…五行說其物から見ても右の如き俗說は成立ち得ざるものであることを一言して見よう」[13]と述べ、丙午の解釈が複数存在し、それらが互いに矛盾することを示す方法で打破を試みている。

まず新城は、干支及び十二支に対する五行の配当に基づく丙午の迷信の根拠について、

> 思ふに火災のことも夫婦關係のことも共に五行說の考に基いたものであらう。干支を五行に配當すれば、丙は火の兄であり午も火である。方位に配當すれば丙は南微東であり午は正南である。故に丙午は火の重なり盛陽の重なれるものなので、この年には火災多く、この年に生れた女は氣が强く亭主をも喰殺す程だといふのであらう [14]

と論じている。つぎに新城は六十干支に対して五行の配当し、それぞれに付した名称によって人の運勢を判断する納音法に基づく丙午の解釈「天河水」について、

> 丙午、丁未は天河水で、神聖なる水である。決して火ではない。天の河は古くから牽牛織女の美はしき物語に色とられて居る…（中略）…私の見る所によれば、牽牛織女の古傳說は、星辰界と人間界とを通じて宇宙に磅礴たる愛の精神を表現せるものである。天の河の水を本性として居る人は決して緣遠くある筈はない [15]

と解釈した。さらに九星術に基づく明治39（1906）年丙午生まれの本命について、「明治三十九丙午年生れの人は本命四緑木である。詩に曰、桃の夭々たる其葉蓁々たり、この子こゝに嫁ぐ其家人によろし。これも緣起は頗る宜しい」[16]との見解を示した。そして、新城は、「丙午の干支別々に見れば火であり、其融合したる納音から見れば水であり、更に九星配當から見れば木である。斯くまちく歸着する所がないのは殊に面白い。畢竟五行說のでたらめなる、五行配當の無理なることを遺憾なく暴露して居るものである」[17]と結論し、丙午の迷信を打破したのである。さらに新城は「(6)

丙午」において、丙午生まれの女性の自殺に関する新聞記事に対して、

> 丙午歳生の娘さんが、自分の運命を悲觀し、又は一二の緣談が丙午生れの故を以て破れたのを悲んで、自殺したといふ實例がある。私が新聞紙上にて氣がついただけでも五件ほどあつた様に思ふ…（中略）…これは決して新聞紙の三面種として輕々に看過してはならぬ。斯の如事件がたゝ一つあつてもそれは不當なる迷信の迫害である。重大なる社會的罪惡である。我々は此事件に直面して大に猛省しなければならぬ。社會的罪惡を釀成したる人々は等しく重大なる責任を負はなければならぬ[18]

と論じ、丙午の迷信を受け入れ、社会的罪悪を醸成した人々の責任を厳しく糾弾している。

3．新城の迷信打破活動に対する家相学者及び姓名学者の批判

新城の迷信打破活動を批判した人物の一人、家相学者飯田天涯は「京都帝大總長理學博士新城新藏氏の迷信論の誤謬を指摘す（新城博士の著書「迷信」記事に對する反駁）」[19]において、

> 博士の迷信打破運動は、趣旨に於ては大いに賛同する所であり、又その研究の中には、他山の石として、吾人の參考に資する點もあり、又或點に於ては悉く同意見の節もあるが、一切の類似事項を一括して、凡て迷信として排斥し去つたのは、恰も角を撓んとして牛を殺すの愚を演じたもので、尊重すべき迷信打破運動の價値を、殆んど抹殺し去るものである[20]

との見解を示している。さらに飯田は、新城の迷信打破活動を意識したと思われる論考「丙午の迷信を打破す」[21]において、丙午を「荒唐無稽の迷信である」[22]と断じている。

また、同じく新城の迷信打破活動を批判した姓名学者熊崎健翁は「玉石混淆の疎論」[23]において、

> 予は平素、其の篤學と忠實との點に於いて敬意を表して居る京都帝國大學總長新城新藏博士が…（中略）…各部位を通じ、二十三、三十三數旭日昇天の旺威、而も智學聰慧、才氣煥發の表象を有し、加ふるに總數五十六の偉人相を以て今日の成功を得乍ら、餘りに一方に偏し、自己の信念に囚はれ過ぎ、一切の運命學を以て悉く之れであると論斷せられるのを遺憾とせざるを得ないのであります。
>
> 或は九星術の如き、或は六曜十二直の判斷の如き、其他坊間に流布せる低劣卑俗、全く科學的根據も、靈學的理據もなく、全然取るに足らざる俗間の運命判斷に對して、迷信以て世俗を誤るものと疾呼せらるゝのは當然過ぎる程當然のことにして、その熱心には感謝を吝まないが、玉石撰別の明智なく一切の形而上の問題を否認し去らんとするが如き態度に對しては、今更乍らその淺薄と偏見を惜んで止まないのであります、同氏の成功も學才も、其偏見的性格も、亦先年愛妻を喪はれた不幸も、御子息に對する人知れぬ苦慮も皆悉く同氏の姓名暗示その儘であることは「姓名の神祕」に對照すれば、明瞭たることで、之も運命誘導の結果と思へば到し方のないことであります[24]

と論じ、「新城新藏の姓名判斷」を通して、新城の活動を批判している。こうした熊崎の姓名判断に対する新城の反応を、冨田達は「新城所長と私」[25]において、

> 其の「新城新藏」の名を私は又、意外な、實に意外なところで發見して、益々此の名は親しみ

を感じたのであつた。それは某氏著の姓名學の書物である…（中略）…著者は先生の迷信論によつて幾分か神經を尖らしたのではないかと想像されるのは、先生の姓名判斷をなして先生の不幸な一面を長々とかき立てゝあつたと記憶している。此の書物のことを或時所長にはなしたのに、所長は大笑して多くは語られなかつたのであるが、唯「吾々老人や過去の人たちの姓名判斷なら誰にでも出來る筈だ…（中略）…其れではマア一種の広告看板に利用されたわけだネ」と大笑された[26]

のように紹介している。新城の迷信打破の信念はこのような批判で揺るぐことはなかったのである。

4．新城の迷信打破活動に対する評価

新城新藏の中国天文学史研究の学統を受け継いだ藪内清は、新城の『迷信』について、

博士はもとより科学者であり、合理主義者であった。中国天文学史研究の副産物といってよいものに、暦註を中心とした迷信記事の来歴を研究し、それらが科学的根拠のない妄説であることを確かめ、大正十四年に『迷信』を出版された…（中略）…博士は京都帝大総長、さらにまた上海自然科学研究所長となられた履歴にみるように、単なる象牙の塔にとじこもるような学者ではなかった。学問の成果を実践に移すことを考えられた信念の人であった…(中略)…俗っぽい問題を取りあげた本であるが、この『迷信』は研究書としてすぐれたもので、今日でも有益な書物である[27]

と評価している。

また、吉川徹は『ひのえうま――江戸かられいわの迷信と日本社会』光文社、2025年において、丙午の迷信は自己成就的予言の性質を持っていること、そして、丙午の迷信打破を目的とした『丙午さとし書』に対して、「私見では、一連の丙午さとし書には、根本的な事態の取り違えがあるように思われます」[28]と論じ、『丙午さとし書』では丙午の迷信の拡大を防ぐことは困難であったと結論している。

吉川の観点に基づいて新城の迷信打破活動を評価すれば、「迷信の起源来歴を明らかにし、伝統的にも何らの有難味のないものであることを示す」という新城の迷信打破の方法は「根本的な事態の取り違え」ということになる。しかし、新城の迷信打破活動は「迷信漸滅論に基づいた迷信界に配慮する立場」、「丙午の女性の子世代であり、親世代であるという当事者の立場」、「自己成就的予言の受容に対する批判的立場」、そして、「科学者の社会的責任を踏まえた立場」という様々な立場に基づいて行なわれたものであり、こうした立場で行なわれた迷信打破活動を単純に「根本的な自体の取り違え」と捉えるべきではないだろう。さらに新城の丙午の迷信打破活動が家相学者による丙午の迷信打破活動を惹起したことには、大きな歴史的意義があったと解釈すべきであろう。

5．おわりに

新城新藏の迷信打破活動について、新城が活動に取り組むこととなった経緯、新城の活動の具体的な内容、新城の活動に対する家相学者及び姓名学者による批判を基礎に分析してきた。これらの分析を踏まえ、新城新藏の迷信打破活動の歴史的意義は、

1）丙午生まれの女性の子世代であり、丙午生まれの女性の親世代であるという当事者の立場で迷信打破活動に取り組んだこと

2）科学的、合理的態度に加え、自己成就的予言の受容に対する批判的立場、迷信漸滅論、研究者

の社会的責任等、様々な立場に基づく迷信打破活動を行なったこと
3）迷信打破活動を通して、家相学者による丙午の迷信打破活動を惹起したこと
以上の3点にあるということができるだろう。

注

1）本発表は、2026年1月30日に京都大学人文科学研究所「自然と人間研究班」研究報告に於いて発表した「新城新蔵の迷信打破活動」の内容を要約し、加筆修正を加えたものである。
2）新城新蔵に関する主要な文献は以下の通りである。
荒木俊馬「故新城新蔵博士」『科学』8巻13号（1938年）、32–34頁。
荒木俊馬「新城所長年譜」『自然』8号、上海自然科学研究所倶楽部学芸部、1939年、87–99頁。
荒木俊馬「新城所長著作目録」『自然』8号、上海自然科学研究所倶楽部学芸部、1939年、100–105頁。
小沢賢二『中国天文学史研究』汲古書院、2010年。
株本訓久「日本現代天文学史における新城新蔵の役割」『科学史研究』36巻200号（1997年）、260–70頁。
株本訓久「平山清次のケフェイド変光星の理論研究――新城新蔵の研究との比較を中心にして」『科学史研究』40巻217号（2001年）、12–23頁。
株本訓久「新城新蔵の銀河系概念形成過程」『科学史研究』40巻218号（2001年）、97–103頁。
株本訓久「新城新蔵の迷信打破活動」『天文教育』14巻2号（2002年）、62–66頁。
株本訓久「新城新蔵先生の生涯と活動」『宇宙会』32号（2021年）、32–68頁。
京都大学宇宙会『京都大学宇宙物理学教室並びに天文台回想録』京都大学宇宙会、1997年。
小暮智一「京都における天文学の草創と伝統」日本天文学会百年史編纂委員会編『日本の天文学の百年』恒星社厚生閣、2008年、27–35頁。
小暮智一『現代天文学史――天体物理学の源流と開拓者たち』京都大学学術出版会、2015年。
佐伯修『上海自然科学研究所』宝島社、1995年。
能田忠亮「新城博士の業績」『天文』1巻6号（1938年）、271–73頁。
能田忠亮「新城新蔵博士伝」『星の手帖』8巻、河出書房新社、1980年、93–98頁。
藪内清「師を語る・新城新蔵先生」『月刊天文ガイド』1974年10月号、誠文堂新光社、1974年、37頁。
藪内清「東洋学の系譜――24　新城新蔵」『月刊しにか』3巻3号（1992年）、100–5頁。
李嘉冬「新城新蔵と日本の東方文化事業――上海自然科学研究所長時代の活動を中心に」『京都大学大学文書館研究紀要』8号（2010年）、21–34頁。
Toshima Araki, "Shinzo SHINJO (1873–1938)," *The Report of the National Research Council of Japan* 2, no. 8 (1939): 667–74.
Tomokazu Kogure, *The History of Modern Astronomy in Japan* (Springer Nature Switzerland AG, 2021).
3）新城新蔵「暦の統一　四　暦日に關する迷信　五　暦の一統」『東京朝日新聞』1921年1月3日朝刊、4頁。
4）新城「暦の統一」4頁。
5）新城「暦の統一」4頁。
6）新城新蔵『迷信』興学会出版部、1925年、緒言1–2頁。
7）新城『迷信』3頁。
8）新城『迷信』34頁。
9）新城『迷信』36–37頁。
10）新城『迷信』73頁。
11）吉川徹『ひのえうま――江戸かられいわの迷信と日本社会』光文社、2025年、61–63頁。
12）新城新蔵「丙午の年に生れた女の運命＝憫れむべき迷信の犠牲者＝五行説のでたらめ＝」枝元長夫編『科學を基礎とした文化生活』第五編、大阪毎日新聞、1925年、75–79頁及び新城『迷信』132–39頁。
13）新城『迷信』134頁。
14）新城『迷信』133–34頁。
15）新城『迷信』136頁。
16）新城『迷信』137頁。

17) 新城『迷信』137–38 頁。
18) 新城『迷信』138–39 頁。
19) 飯田天涯「京都帝大總長理學博士新城新藏氏の迷信論の誤謬を指摘す（新城博士の著書「迷信」記事に對する反駁）」『家相方鑑大全』浩文社、1932 年、458–92 頁。
20) 飯田『家相方鑑大全』492 頁。
21) 飯田天涯「丙午の迷信を打破す」『方鑑大正 15 年』経世堂、1925 年、巻頭 5 頁。
国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/918421/1/5、最終アクセス日 2026 年 8 月 4 日。
22) 飯田「丙午の迷信を打破す」巻頭 5 頁。
23) 熊崎健翁『姓名判断運命の神祕』実業之日本社、1930 年。
24) 熊崎『姓名判断運命の神祕』22–23 頁。
25) 冨田達「新城所長と私」『自然』8 号、上海自然科学研究所倶楽部学芸部、1939 年、150–63 頁。
26) 冨田「新城所長と私」151–52 頁。
27) 藪内清「東洋学の系譜——24　新城新藏」『東洋学の系譜』大修館書店、1992 年、177–78 頁。
28) 吉川『ひのえうま』43 頁。

丙午の年に、なぜ出生数は激減しなかったのか
——2026 年 5 月までの速報から考える迷信・社会の変化・科学教育

多久和　俊明、上田　英良*

1．はじめに——2026 年という「社会実験」の年

「丙午（ひのえうま）の年に生まれた女性は気性が激しく、夫の命を縮める」という言い伝えは、近代日本において実際の出生数を大きく動かしてきた[1)]。2026 年は 60 年に一度めぐってくる丙午の年である。前回の 1966 年には、出生数が前年より約 25%、約 46 万人も減少した。近代国家において、戦争・災害・政策変更ではなく、迷信と社会的圧力を主要な契機として、これほど明瞭な出生行動の変化が観察された例はきわめて特異である。

本報告の問いは、「2026 年丙午年、出生数は激減したか」である。2026 年 5 月速報までを見るかぎり、答えは否である。厚生労働省が 2026 年 7 月 24 日に公表した人口動態統計速報によれば、5 月単月の出生数は 59,663 人で前年同月比 1.7%減、1～5 月の累計では 282,222 人で前年同期比 0.4%増であった。昭和 41（1966）年に年初から前年同月比 27～30%の減少が続いたのとは、明らかに様相が異なる。ただし速報値には日本における外国人なども含まれるため[2)]、本報告はあくまで速

* ネコハウス・ラボ　Email: tnnn88506@zeus.eonet.ne.jp
注：予稿の題名（「現代日本の若者は史上初めて丙午迷信を断ち切れるか——予想・仮説と実験・検証、および科学教育・人権教育の視点から」）を改題。本稿は 2026 年 5 月分の人口動態統計速報（2026 年 7 月 24 日公表）までのデータにもとづく中間報告である。